

保育カンファレンスの検討（その3）

—保育者の連携を手がかりにして考える—

○伊集院 理子 榊田 正子 吉岡 晶子 田中 三保子 上坂元 絵里 高橋 陽子
佐藤 寛子 岩間 里香（お茶の水女子大学附属幼稚園）

1. はじめに

私たちは、94年度より園内研究として保育カンファレンスをおこなってきた。これまでに、「保育カンファレンスの検討（その1）」で最初の2年間のカンファレンスの経緯について、「保育カンファレンスの検討（その2）」でカンファレンスの中での一人の保育者の変容について報告してきた。今回は保育カンファレンスが園全体の保育にどのような影響を及ぼしているかについて、具体的事例を通して検討していく。

昨年度の4月に私たちの園では、好奇心旺盛で、自分のクラスの中には収まらず、幼稚園中を自分の興味の赴くままに探索し、いく先々で自分の欲求をストレートに行動に移す3才男児Sをむかえた。そのSに対して、保育者間で援助の仕方について詳細に打ち合わせを重ねたわけではないが、担任、フリーの保育者、他のクラスの担任がそれぞれの役割を担い合い、連携して保育に当たることができた。これは、今までにはなかったことである。Sの保育の事例を通して、連携のありよう、私たちの保育の変化、そこにカンファレンスが果たしてきた役割について考察する。

2. Sの保育の事例

担任、フリーの保育者、他のクラスの担任の3者がどのように考え、Sに関わってきたのかを、それぞれの立場からまとめてみる。

◇担任の立場から

好奇心旺盛なSに対しては、行動を制限するのではなく、その欲求を尊重し動きに沿った対応を重ねていくことが大事と考えた。それを担任一人でやろうとすると、かなりの時間Sについている状況が予想され、S以外の19名の子どもたちが不安定になりかねない。Sには、出会った保育者がその時に必要な対応をしてくれるであろうから、Sを追うことより、まずは他の子どもたちとのつながりをしっかり持ち、それぞれが安定できるようにしたいと考えた。他のクラスの担任、フリーの保育者には、必要なことはその場その場でSに伝えて欲しいという私の意向を伝え、保育中お互いに連絡を密に取り合い、どこで何をしているのか、どんな様子かがなるべく把握できるようにした。保育が終わると、自然とその日のSについて話をするのが多くなり、Sだけではなく、私も支えられていると思えるようになった。また、担任としてSとのつながりはしっかり持ちたいとも思い、泣いたり、不安になっている時には出来るだけ関わり、気持ちを立て直せるように、幼稚園生活の基盤になるのは自分のクラスとい

うことがSに伝わるように心がけた。降園時に集まると、Sは決まってもめごとを起こし、周りの子どもたちは恐がってしまうことが多かった。そこでSが特別目立つ存在にならないように、担任がS中心に動いているという雰囲気にならないように気をつけ、Sがクラスの一員として位置づくようにした。2学期になると、Sは自分からクラスにもどってきたり、自分から担任に訴えてくるようになった。

◇フリーの保育者の立場から

フリーの保育者は、担任と子どもたちが織り成す生活を支える立場であり、担任の保育に沿う形で動くことを日頃から考えている。Sの場合にも、担任がどのような立場を取ろうとしているのかを出来るだけ細やかに察知し、担任がSと直接関わろうとするならS以外の子どもたちへの配慮を、また担任がクラス全体の動きに関わろうとしているなら、Sへのケアを、という具合に柔軟に役割を調整するようにした。保育室以外で落ち着いて遊んでいる時には、Sなりの環境への関わりを尊重し、その所在や様子を担任に合図したり通りすがりに手短かに伝えて、担任にSの状況が把握できるようにした。降園の時は、Sの気持ちが出来るだけ落ち着くようにし、タイミングをみはからって保育室に連れて行くことで、無用のトラブルの可能性を減らし、クラスにおけるSの存在がマイナスイメージにならない様にと担任の意向に沿うように配慮した。Sの色々な状況において、その判断に迷いを感じることもなかったわけではないが、そのような場合も、保育終了後にそれを率直に伝え合える関係ができていた。

◇他のクラスの保育者の立場から

Sは、年中、年長の子どもたちが遊んでいるところにどんどん関わってきて、自分の思うようにいかないと、大声で泣き叫ぶことが多かった。泣き叫ぶSに対して、子どもたちは、Sのことを入れようとしなかったり、Sの要求に耳をかそうとしなかった。私は、両者の間に入りそれぞれの思いを相手に伝えたりしながら、Sと自分のクラスの子どもの折り合いがつく方向を子どもたちといっしょに探るようにしてきた。Sの要求は、いつも受け入れられることばかりではなく、大泣きして担任のもとに戻すこともあったが、うまく折り合いをつけて一緒に遊べる状況をつくりだせることもあった。Sとのやりとりを繰り返す中で、自分のクラスの子どもたちは、少しゆずって相手の思いを受け入れることを体験していった。Sにとっても、自分の要求を押し通すばかりではなく、少しおさえることで、年上の相手がある程度歩み寄ってくれて、

最終的には自分の思いを遂げられる体験をしていくことは、とても意味のあることだと考えていた。

このように、それぞれの立場から、型にはまらないSの行動を素直な表現として肯定的に捉え、Sの行動が出来るだけ問題状況を生み出さないように、そしてSの思いがまわりと折り合いをつけた形でかなえられるよう園全体で連携出来るようになってきている。

3、私たちの保育の変化

Sの保育を振り返りながら、連携の基盤になったと思われる私たちの保育の変化について、カンファレンスの中で考察をすすめてきた。それは以下のようにまとめることができる。

①保育者間の信頼関係が広がってきている

- ・Sの担任は、自分が関われない場面でのSの保育を、信頼して他の保育者に委ねている。
- ・他の保育者はSに対してどんな関わりをしても、担任が受け入れて先につなげてくれるという信頼感をもって、Sの保育にあたっている。

②日常の保育場面での保育者同士の率直な伝え合いができるようになった。

- ・保育中、保育後にSの様子、Sとの関わり、Sについて考えていることなどをお互いに話すことで、共に保育をしている連帯意識が育ち、さらに伝え合いが活性化している。

③保育者間に保育に関する共通認識がひろがっている。

- ・Sの保育に対しては基本的に共通していると実感できるようになって、それぞれの保育者が出会った所で、迷いはあってもその人なりに保育にあたっている。
- ・フリーの保育者が、園内の役職などの立場にはとらわれず、共通に保育を支えるものとして主体的に動けるようになった。

④自分の保育が柔軟になり、お互いの保育のよさを認め合えるようになった。

- ・Sの行動をきっかけにして、保育者同士の保育が出会う場面が増え、お互いの保育の良さが実践を通して分かり、相手の保育を取りこみながら自分の保育をふくらませていけるようになった。

⑤子どものことについて、他の保育者、他のクラスの子どもの関わりも含めて、重層的に考えられるようになってきている。

- ・担任は、他の保育者から伝えられる情報によって、自分なりのS像をさらにひろげ、それを保育にいかしている。

⑥クラスの子どもを担任一人で背負わなければならないという気負いを持たずにいられるようになり、保育者として、自分のクラスの子供だけではなく、園全体の子どもたちに関わろうという意識が広がっている。

- ・他のクラスの保育者はSを侵入者として担任のもとに戻すのではなく、Sにとっても、他の子供たちにとっても、よりよい体験になるように考えて関わっている。

⑦子どもたちは、前よりも自由に他の保育者や他のクラスの子供たちと関わって、幅広い体験を重ねられるようになった。

- ・担任が自分のクラスに収めようとしなかったことで、Sは興味の赴くままに自由に行動し、担任との間だけでは得られない体験の中で多くのことを学んでいった。

⑧このように関係が開かれていく中で、子どもにとっての安定の基盤となるクラス、担任との関係の重要性を再認識するようになった。

- ・Sは、相変わらずクラス以外に出向いていくことも多いが、クラスに戻ってきて気持ちを立て直したり、担任の見える所で過ごす時間が増えてきた。

4、カンファレンスが果たしてきた役割

このような私たちの保育の変化は、4年間にわたってカンファレンスを積み重ねてきた成果と考えられる。このような成果が得られたのは、カンファレンスが以下のような役割を果たしてきたからだと言えよう。

- ・個々の保育者が保育の中でその時気になっていることを話題にだし、そのことについてみんなで考えてきた。その中で、直接的に問題解決の具体的方法を求めたわけではないが、その問題にまつわることでそれぞれが自分の保育に照らし合わせて、保育をしているの素直な感覚を出し合ってきたことで、新しい視点で問題を捉えられるようになっていった。

- ・様々な話題を通して保育者である自分、互いに影響しあっている保育者集団の中での自分というものを見つめ、自分たちの保育の本質ということを探っていった。

- ・その中で自分の保育の特徴、他の保育者の保育の特徴が明らかになり、自己理解、相互理解を深めてきた。

以上のことは、カンファレンスの中でのことにとどまらず、実践の場でのそれぞれの保育を柔らかくし、自分らしく保育できるようになっただけでなく、他の保育者の良さを自分の保育の中に取り込もうとしたり、まわりの状況に即した役割を柔軟に取ろうとしたり、保育の中で体験したことを次の保育にいかそうとするなど、保育者が保育の中で学び取っていく吸収力につながっていった。

紆余曲折しながらカンファレンスを重ね、その中で一人一人の保育者が自己変容を重ねてきたことで、考察を進めてきたような全体の保育の変化がもたらされている。こうした保育の変化は、Sの事例だけではなく、日常の保育場面での様々な連携を生み出している。しかし、常にうまくいくことばかりではない。Sの事例が上記のようにうまくいったのは、Sの素直さ、Sの担任の保育経験の豊かさに負っているところも大きい。子どもの違いや、保育者の保育経験の違いによって、連携のあり方は違ってくる。どんな場合にもお互いをいかしながら支えあえるような連携のあり方を、保育の場、カンファレンスの場でさらに探っていきたい。